

野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

ヤブコウジ *Ardisia japonica* (Thunb.) Blume
(新エングラ体系, クロンキスト体系: ヤブコウジ科 Myrsinaceae
APG 体系: サクラソウ科 Primulaceae)

連絡先: 城西大学薬学部生薬学教室
shiratak@josai.ac.jp

春まだ浅い林の中, 小さな赤い実をつけた常緑の小低木を見かけます。ヤブコウジ (藪柑子) は別名を十両 (ジュウリョウ) ともいい, 北海道 (奥尻島), 本州, 四国, 九州, 国外では朝鮮半島, 中国大陸, 台湾に分布します。冬に赤い果実をつけ美しいので栽培もされます。草のように見えますが, 実は木本で細く長い匍匐^{ほふくけい}茎があり, 斜上する茎は, 高さは 10 ~ 30cm になります。茎の上部と若い花序には短い粒状の毛が生え, 茎の 2 節あたりに深緑色で光沢があり, 縁に細かい鋸歯のある 6 ~ 13cm の長楕円形または狭楕円形の葉を 3 ~ 4 枚輪生します。花序は散形状になり, 7 ~ 8 月, 径 6 ~ 8mm の白色または帯紅色の両性花を

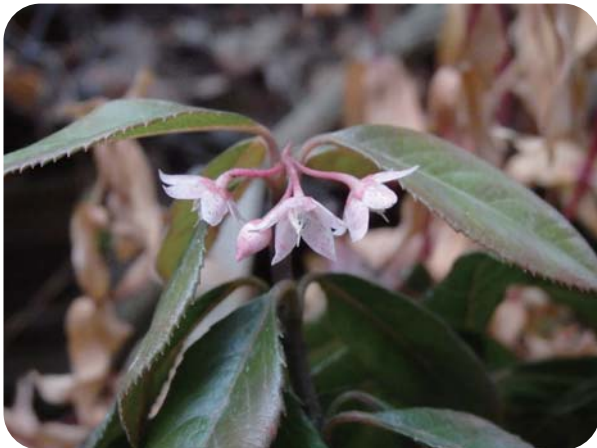


写真1 ヤブコウジ (花)



写真2 ヤブコウジ (果実)



写真3 マンリョウ (果実)



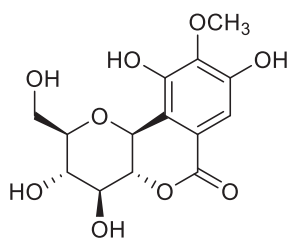
写真4 センリョウ (果実)



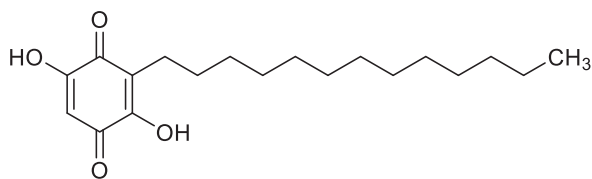
写真5 カラタチバナ (果実)



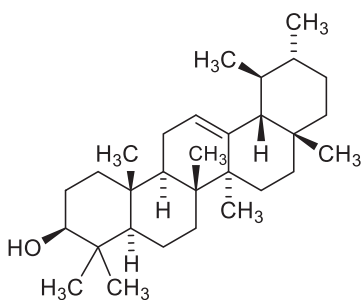
写6 アリドウシ (果実)



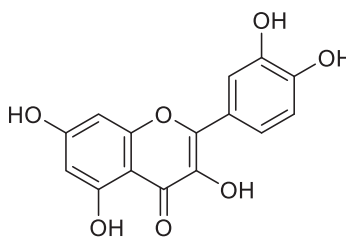
bergenin



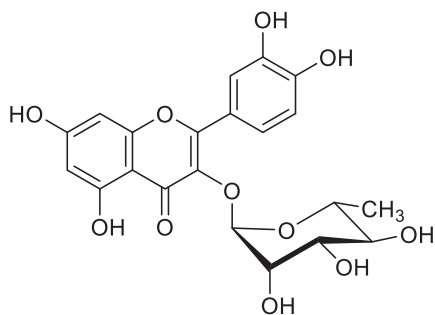
rapanone



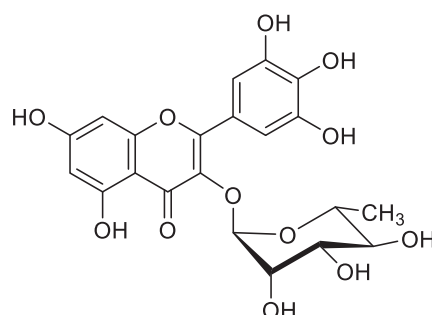
α -amyrin



quercetin



quercitrin



myricitrin

図1 成分の構造式



写真7 生薬：シキンギユウ（紫金牛）

下向きにつけます。雄蕊は5個あり花冠裂片より短く、雌蕊は1個で花冠と同じ位の長さで、子房は卵円形で上位につき1室あります。果実は液果様の核果で径5～6mmの球形となり、冬（10～11月）に赤色に熟し、中に1個の大きな種子があります。生薬としては、晩秋に掘り上げた根茎と根を水洗し、陽乾したものを紫金牛（シキンギユウ）といい、鎮咳、消炎、解毒作用があるとして、消化不良、膀胱炎、腫れ物、咳、のどの腫瘍などに用いられ、根や葉の成分としては、イソクマリン誘導体のbergenin、ベンゾキノンのrapanone、トリテルペノイドの α -amyrine、フラボノイドのquercetin, quercitrin, myricitrinなどを含み、rapanoneには回虫・条虫駆除作用のあることが

報告されています。ヤブコウジは万葉の昔より日本人に愛されてきた植物の一つで『万葉集』にも山橘やまたちばなの名で多くの歌が詠まれ、江戸期の印籠の下絵にも用いられたりしました。また、正月の縁起物として重宝され、マンリョウ *Ardisia crenata*（万両、サクラソウ科）、センリョウ *Sarcandra glabra*（千両、センリョウ科）、カラチバナ *Ardisia crispa*（百両、サクラソウ科）、アリドオシ *Damnacanthus indicus*（一両、アカネ科）などと同様、寄せ植えの素材として、今も利用されています。日陰や寒さにも強く、栽培が容易なことから観葉植物としても利用され、江戸時代、寛政年間には葉に斑が入るヤブコウジが人気をよび、多くの品種がつくられ、古典園芸植物の一つとしてもはやされ、現在でも約40種の品種が保存されています。ブームは明治20年ごろから新潟県で再び流行し、明治27年には全国に広がり、相当な高値で取り引きされたものもあったそうです。このように人々を熱狂させたヤブコウジの魅力は、葉に入る黄や白の斑や、葉の縁がコンペイトウのような形に突出する「コンペ」とよばれる葉形によるそうです。ヤブコウジは生命力があり縁起物として扱われた経緯からおしはかると落語『寿限無』の中の「…やぶらこうじのぶらこうじ…」とは本植物をさすものと思われる。